令和３年度　研究のまとめ

「主体的な姿」を目指した授業づくり（２年計画の２年次）
～コミュニティ・スクールの推進を通して～

岩手県立花巻清風支援学校

Ⅰ　研究主題

（1年次）「主体的な姿」を目指した授業づくり（２年計画の１年次）
～単元・題材構想シートと個別の評価シートの活用を通して～

（2年次）「主体的な姿」を目指した授業づくり（２年計画の２年次）
～コミュニティ・スクールの推進を通して～

Ⅱ　主題設定の理由

本校では、平成３０年度より学校目標に「仲間とともに今を主体的に」を掲げ、教師主導ではなく児童生徒主体の教育活動を行っている。研究推進においても、児童生徒一人ひとりが「今」、いきがい、やりがい、手応えを感じられる授業を目指し、授業づくりや授業改善を行ってきた。

令和２年度研究では、テーマを「『主体的な姿』を目指した授業づくり～単元・題材構想シートと個別の評価シートの活用を通して～」として、授業づくりと三観点による評価に取り組んだ。年間を通じて、授業づくりや授業改善について PDCA を行い授業担当者間で検討、共有すること、児童生徒について年間目標や単元目標を検討、共有することを通して、目指す主体的な姿について、どのような授業づくりをすべきか追究してきた。

昨年度のまとめから、観点別の評価の仕方を具体的に理解できたことや、シートの活用が職員間で共通理解を図るためのツールとなったことが成果として挙げられた。一方、「主体的な姿」の捉え方の見直し、シートをより実践で生かせるような工夫等が改善点として挙げられた。

昨年度、令和３年度の学校経営方針として、コミュニティ・スクール（以下 CS）の推進が重点として打ち出されたため、昨年度末の全校研究会の場では、テーマを継続し CS の取り組みを中心に取り入れて進めていくことを確認している。

このことから、令和３年度の研究においては、CS に関わる単元・題材において、児童生徒が主体的に活動する授業づくりを目指していく。また、取り組みを継続し深化させていくためにも、授業実践を蓄積し内外に発信していきたいと考える。

以上のことから、本研究では、主題を「『主体的な姿』を目指した授業づくり」とし、副題を「コミュニティ・スクールの推進を通して」と設定することにした。

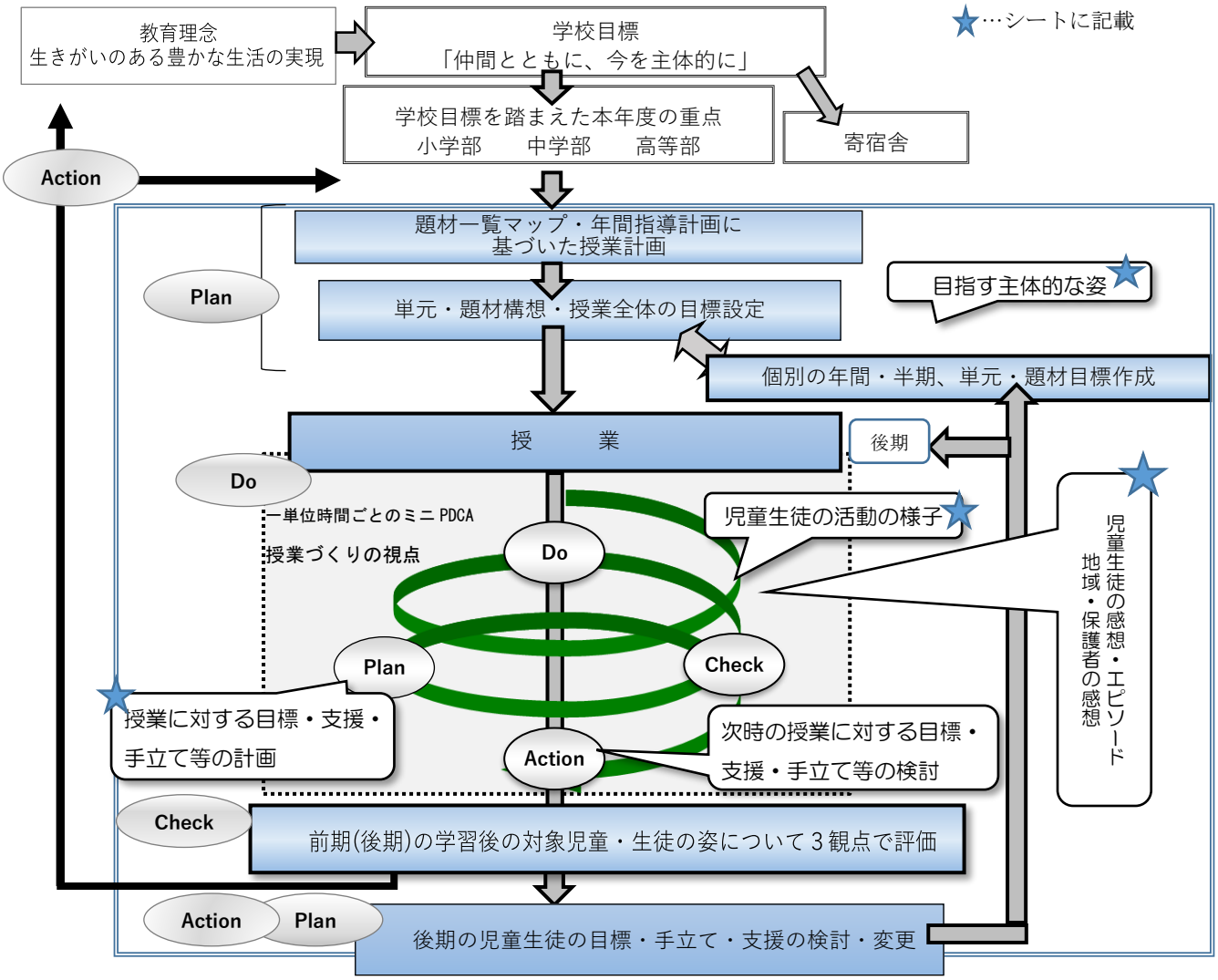
Ⅲ　研究の目的

・単元や日々の授業において、目標や手立て・評価等の授業づくりを PDCA のサイクルで行う。目指す主体的な姿について職員間で共有し、どのような授業づくりをするべきか追究する。
・児童生徒の主体的な姿につながる、地域と連携・協働するよりよい教育活動の在り方を追究する。

Ⅳ　研究の内容・方法

1　各学部等における「主体的な姿」の捉え方について、共通理解する。
2　授業グループ＝研究グループと位置づける。題材一覧マップ・年間指導計画に基づき、CS に関する単元計画・目標を立て、実践する。
3　授業実践後、児童生徒の活動の様子を記録する。
4　３で記録した付箋を拡大した実践記録シートに貼る。その際、児童生徒の様子が、三つの観点のいずれに当てはまるかを検討する。
5　授業づくりに関して成果や課題をまとめる。
6　主体的な姿について、年間を通して授業実践を振り返り、その変容や当初に設定した主体的な姿との妥当性の検証をする。
7　地域や保護者との連携・協働の感想やエピソードを記録する。
　【地域】関係職員・地域連携主任が聞き取り　【保護者】連絡帳など　【教職員】各自が記録

Ⅴ　研究構想図



Ⅵ　推進計画・実施内容

1　年度における研究内容

１年次 Ｒ２	・各学部・研究対象授業で目指す主体的な姿を検討、授業を通して検証。 ・年間を通し、個々の目標と評価を検証し、仮説の妥当性を検討。 ・年間の授業実践を振り返り、次年度の題材一覧マップ、年間指導計画を立案。 ※ステップアップⅡ研修会に授業提供を行い、他校教職員からの意見を聞き、研究に反映させる。
２年次 Ｒ３	・題材一覧マップ・年間指導計画に基づいた、実践。 ・年間を通し、学習グループにおける目標と児童生徒の様子について記録。 ・まとめと考察。

２　令和３年度　日程

月	日	全体の取り組み	グループの取り組み
６	２２（火）	第１回全校研究会 ・２年次目の研究内容、方法、進め方についての確認	
７	１３（火）		研究日①学部研 ・グループの確認 ・シートの記入について ・各グループにおける「主体的な姿」の確認 ・研究対象単元、題材の設定
８	１７（火）		研究日②学部研 ・授業実践シートを活用した授業の振り返り・計画
９	７（火）		研究日③学部研 ・授業実践シートを活用した授業の振り返り・計画
１０	１９（火）		研究日④学部研 ・授業実践シートを活用した授業の振り返り・計画
１１	１２（金）	高教研講演会 「主体的な姿をめざした授業づくり －知的障害教育の独自性に着目して－」 講師：佐々木全氏 （岩手大学大学院教育学研究科准教授）	
１２	１４（火）		研究会⑤学部研 ・グループごとのまとめ ・実践記録シート全記入 ・研究アンケートの記入
１	１８（火）		研究日⑥学部研 ・学部ごとの研究のまとめ
２	２５（金）	第２回全校研究会 ・今年度全体研究のまとめ ・次年度研究の方向性について	

Ⅶ　研究実践

１　「主体的な姿」についての共通理解

本校は、小学部、中学部、高等部、寄宿舎、そして５つの分教室がある。発達段階が異なり、障がいの程度が異なる児童生徒が在籍していることから、児童生徒の実態に合わせた「主体的な姿」にしたいと考えた。そこで、研究グループごとに在籍する児童生徒の主体的な姿を話し合い、どのような姿が「主体的な姿」として捉えられるか共通理解を図った。各研究グループで共通理解を図った内容は、各研究グループの頁に記載する。

２　高教研講演会

岩手県高等学校教育研究会特別支援部会の本校の今年度の講演では、本研究テーマに関連させ、「主体的な姿を目指した授業づくり　－知的障害教育の独自性に着目して－」と題して岩手大学大学院教育学研究科准教授の佐々木全氏に御講演をいただいた。

学習指導要領に基づいた評価や計画の立て方や各教科や合わせた指導における基本的な考え方

など実践的な内容を学ぶことができ、児童生徒が「主体的」に学習に取り組むための手立てなどについて理解を深めることができた。

以下に参加者の感想の一部を紹介する。

・手立てについて、特に各教科との関連性についての内容が特に分かりやすかった。教科との関連や、系統性など計画段階で考えながら取り組んでいきたい。

・合わせた指導だからできる、社会参加、自立に向けた指導が特別支援教育の魅力であることを再確認することができた。

・児童の目指す姿や、一年間の目標を考えるとき、保護者の思いや、児童の毎日の生活から考えていました。しかし、目標を立てる際、今の児童や保護者の状況・思いを汲み取ることはもちろん、それが「生きる力」や「将来働くことのできる生活」と結びつくのかを考えることの大切さを改めて実感しました。どうしても今の児童の様子だけを考えて目標設定をしてしまっていることを感じたので、その児童が生きていく将来も頭に入れながら目標を設定していきたいです。

・支援の３観点について、「ヒト・モノ・コト」から普段の授業を振り返るとそのとおりだなと感じた。その日の授業で「どこを改善すれば良いか」と何となく考えるよりも「〇〇の視点から見るとどうだろう」とする方が有効だと分かった。

・「(一人一人の）状態は、環境的・社会的条件で変わり得る可能性がある。」ということを、ひしひしと感じます。ひと・もの・こと、特に「ひと（センス)」。また、大切なのは「今」であるということに深く共感しました。

・評価する際に「モノ」「コト」と分けて考えることで具体的な子どもの姿が見えてくると思った。また、最後の残り５個のスイートポテトの分け方について算数的思考より心情や生活に即した思考の方が実際的だと感じ、目からウロコでした。

・今までの経験を踏まえて感覚的には、生活単元学習のこの学習活動は、国語のこの部分の内容と関連付けて取り組んでいるなあなどと思いながら進めていますが、シートの中で明示しながら授業づくりをしてみたいと思いました。

・「主体的」との表記について､個別の目標については、より具体的に表記することを改めて意識して目標を立てていきたいと思った。

Ⅷ　令和３年度研究のまとめ

１　研究に関するアンケートまとめ

職員に対するアンケートにおける質問項目は以下のとおりである。（１２月実施）

アンケートにおける質問項目

○２年次である今年度の研究について
【１】「主体的な姿を目指した授業づくり」の視点に立って授業改善に取り組むことができましたか。
【２】児童生徒の姿について、主体的な姿を目指す中で三観点の評価ができましたか。
【３】研究内容・方法はどうでしたか。

（１）　結果及び考察

ア　結果

（ア）全体

回答数（小学部 22　中学部 22　高等部 31　北上みなみ分教室（小学部）4　北上みなみ分教室（中学部）4　遠野分教室小学部 6　遠野分教室中学部 3　寄宿舎 18　　計 110）

各質問項目の回答の割合を下の表に示す。　（数値は、回答数を所属職員数で割ったもの。%）

		取り組むことができた	ややできた	あまり取り組めなかった	取り組めなかった	無回答
【１】「主体的な姿を目指した授業づくり」の視点に立って授業改善に取り組めたか	小学部	50	50	0	0	0
	中学部	14	72	9	0	5
	高等部	39	45	6	0	10
	北上みなみ分教室(小)	100	0	0	0	0
	北上みなみ分教室(中)	50	50	0	0	0
	遠野分教室(小)	17	66	17	0	0
	遠野分教室(中)	67	33	0	0	0
	寄宿舎	56	39	0	0	5
	全体	41	50	5	0	4
		できた	ややできた	あまりできなかった	できなかった	無回答
（２）児童生徒の姿について、主体的な姿を目指す中で三観点の評価ができたか。	小学部	17	61	22	0	0
	中学部	18	64	9	0	9
	高等部	19	42	29	0	10
	北上みなみ分教室(小)	100	0	0	0	0
	北上みなみ分教室(中)	50	50	0	0	0
	遠野分教室(小)	17	66	17	0	0
	遠野分教室(中)	67	33	0	0	0
	寄宿舎	22	56	22	0	0
	全体	24	53	19	0	4
		良かった	まあまあ良かった	あまり良くなかった	良くなかった	無回答
（３）研究内容・方法はどうでしたか。	小学部	45	55	0	0	0
	中学部	14	45	27	0	14
	高等部	26	58	3	3	10
	北上みなみ分教室(小)	75	25	0	0	0
	北上みなみ分教室(中)	25	50	25	0	0
	遠野分教室(小)	17	0	83	0	0
	遠野分教室(中)	33	67	0	0	0
	寄宿舎	56	39	5	0	0
	全体	34	47	13	1	5

（イ）各質問項目における回答（記述）　　（○は成果　●は課題）

「主体的な姿を目指した授業づくり」の視点に立って授業改善に取り組むことができたか

＜選んだ理由（自由記述）＞※一部抜粋

○主体的な姿を整理して共通理解を図ることで、日々の授業で意識して取り組むことができた。
○主体的な姿を具体的に考えたので、イメージをもって授業づくりに取り組むことができた。
○授業づくりの視点を意識したことにより、主体的な姿を目指した取り組みがおおよそできた。
○話し合いの場が意図的に設定され、教員間で意見を出し合って話し合うことができた。
○生徒主体となるような活動内容にできた。
●活動内容によっては、教師が主導となってしまう場面もあった。
●重複学級は授業をしながら記録して残すことが難しかった。
●主体性を意識したが、生徒の実態と活動内容の折り合いをうまくつけることが難しかった。
●単発的な単元だったので、年間を通して取り組むことが難しかった。

児童生徒の姿について、主体的な姿を目指す中で三観点での評価ができたか

＜選んだ理由（自由記述）＞　※一部抜粋

○児童生徒の成長や良い変容を三観点で整理しながらおおむね捉えることができた。
○教師の主観をすり合わせながら、グループなりの三観点での評価を探ることができた。
○生徒の見取りポイントを押さえたことで、評価することができた。反対に評価のポイントがしっかりしているので、生徒のつまずきや目標にせまっている姿を見取ることができた。
●学習指導要領に則った評価ができたかどうかが疑問。評価の観点をしっかりと確認する必要があった。
●意識して取り組むことができたが、特に思考・判断・表現についての評価が難しく、引き続き研修が必要である。
●主体的な姿を意識したが、三観点の評価にはつなげられなかった。
●目標を設定する時点で、三観点を意識した目標にしていなかったので、生徒の様子を後から三観点に分けて整理するのに難しさがあった。

研究内容・方法はどうだったか

＜選んだ理由（自由記述）＞　※一部抜粋

○複数の職員で授業実践シートを作成していったため、支援方法を共通理解することができた。
○単元ごとに振り返ることができ、計画・評価の流れが分かり日常の授業作りを意識して行うことができた。
○簡単な授業実践シートで取り組みやすく、振り返りに有効だった。
○シートをツールとして児童生徒についての評価を複数教員で話し合い、客観性を高められた。
○授業の記録から、児童の主体的な姿を具体的に読み取ることができ、評価につなげることができた。
○コミュニティ・スクールと関連付けた授業を研究で取り上げることにより、ＣＳの実践と研究を一体化して取り組むことができた。
●ＣＳに限定することで、「主体的な姿を目指した授業づくり」との難しさを感じた。
●コロナ禍でＣＳに関わる単元・授業を抽出するのは難しかった。
●「主体的な姿を目指した授業づくり」と「コミュニティ・スクール」とのつながりを明確にできていたのか疑問がある。
●「コミュニティ・スクール」＝「学校運営協議会制度」そのものについての理解を深められていなかった。

●カリキュラムマネジメントを目指すものか、地域交流を目指すものか、職員間で認識の違いがあった。
●“ＣＳに関わる”ではなく、地域との交流に関わる授業を抽出するという表現の方が適しているのではないか。
●シートを基に単元計画を立てるのは難しかった。
●ＣＳは単発なため、積み重ねが難しかった。

＜改善案＞
・研究の対象となる授業が早い段階で分かっていれば良かった。
・CS に関わる授業に絞ってしまうと、児童生徒の実態と離れた授業（主体的な姿を目指しにくい）になってしまうことがあるのではないか。ＣＳと切り離して考えた方がよい。
・CS についての研修が定期的に必要。
・より一人ひとりに焦点を当てて取り組めるシートがよい。

イ　考察
・「主体的な姿を目指した授業づくりを意識して授業改善に取り組むことができたか」の問いに対して、「取り組むことができた」「やや取り組むことができた」を合わせると 91％であった。「主体的な姿を目指す」視点に立った授業づくりの観点の共有が図られ、高い意識で取り組むことができたと考えられる。「取り組むことができた」より「やや取り組むことができた」の割合が高いことから、「取り組むことができた」の回答がさらに増えるように、児童生徒の実態・活動内容に応じて、日常的に意識をもって取り組むことが重要であると考える。
・「児童生徒の姿について、主体的な姿を目指す中で三観点の評価ができたか」という問いに対して、「できた」「ややできた」の回答が 77％であった。その反面、「あまりできなかった」の回答は 18％であった。
　結果や職員の意見から、主体的な姿を目指した授業づくりをする中で、教師間で話し合いながら三観点に整理することがおおむねできたと考える。しかし、三観点の評価について不安をもっている職員も多く、教師の主観によるためどの観点に該当するのか評価するのが難しかったと思われる。主体的な姿から三観点の評価につなげられなかった部分もある。三観点についての理解をさらに深めていく必要があると考える。
・「研究内容・方法はどうだったか」という問いに対して、「良かった」「まあまあ良かった」の回答が 78％であったのに対し、「あまり良くなかった」「良くなかった」の回答は 15％となった。グループごとにシートを通した話し合いをすることで、児童生徒の主体的な姿を客観的にみることができ、評価を次の単元の計画に生かすことができたのではないかと思われる。しかし、研究対象をＣＳに関わる単元に絞ったために、ＣＳについての理解や主体的な姿との結びつき、計画的な単元設定などに難しさを感じることが多かったのではないかと考えられる。

２　研究のまとめ

（１）成果と課題

ア　主体的な姿を目指すための手立ての有効性

各学部・分教室における児童生徒の主体的な姿を共通理解し、その姿を目指して授業づくりを行った結果、児童生徒が力を発揮して主体的に学習に取り組むような学習内容を設定し、有効な手立てを確認することができた。これらの手立ては他の授業づくりにも生かせる要素が多い。

＜表　主体的な姿を目指すための有効な手立て＞

<table>
<tr><td rowspan="2">小学部</td><td rowspan="2">・興味関心のある活動、単元の設定
・繰り返し取り組む活動の設定
・経験したことのある活動及びできる活動の設定。
・視覚的な支援
・活動が見やすい座席配置</td><td>遠野分教室
小学部</td><td>・視覚的な教材、タブレットの活用
・児童の実態やねらいに沿った役割の設定
・児童の実態とねらいに即した教師の声掛けや発問
・繰り返しの活動の設定</td></tr>
<tr><td>北上みなみ分教室
小学部</td><td>・見通しがもてるようカレンダーや次第の提示
・繰り返し取り組む活動の設定
・気持ちを盛り上げるための教材教具の工夫
・活動の選択の機会の設定
・作り方の手本の提示
・道具や材料の選択の機会の設定
・制作物を用いた達成状況の確認
・会話の中で活動の様子を話題する</td></tr>
<tr><td rowspan="2">中学部</td><td rowspan="2">・自分の役割を選択する機会
・シンプルな作業工程の設定
・役割の理解
・繰り返し行うような場の設定
・生徒が分かりやすく職員が情報共有しやすい場の設定
・目標の確認と視覚的な達成状況の確認
・気持ちの切り替えができるような時程の工夫</td><td>遠野分教室
中学部</td><td>・興味関心があり、繰り返し取り組める活動の設定
・体験がお互いにとってメリットのある活動
・取り組んだことを振り返り、まとめて発表する場の設定</td></tr>
<tr><td>北上みなみ分教室
中学部</td><td>・授業の進度が確認できる板書計画の工夫
・映像や写真などの有効活用
・生徒の力で活動するよう支援を控える</td></tr>
<tr><td>高等部</td><td colspan="3">・具体物を用いた目標の設定と反省
・実態に応じた活動内容の設定
・役割の固定化
・活動内容の明確化
・生徒が声を掛けやすい環境の設定
・活動グループの設定</td></tr>
<tr><td>寄宿舎</td><td colspan="3">・手順表の提示
・生徒自ら考える機会の設定
・協働作業の設定
・活動の振り返り
・仕事内容の再確認
・場所や手順を視覚的に提示</td></tr>
</table>

○主体的な姿をめざすための手立て（共通する要素）
・繰り返し取り組む活動
・視覚的な支援
・見通しをもてるような工夫
・興味関心や児童の実態に応じた活動内容の設定
・目標や達成状況の確認（振り返り）
・児童生徒の実態に応じた役割の設定

イ　実践記録シートを通して授業づくり・改善について協議をしたこと

グループでの研究会の際、実践記録シートを通して計画したことで、全員で「児童生徒が主体的に学習に取り組むための手立てはどうか」という視点で、具体的な手立てを確認することができ、授業改善につなげることができた。そして、複数の視点で見ることで、多面的・客観的に児童生徒の姿を捉え、考えを言語化することで児童生徒についてより深く知ることができた。

また、実態に応じて三観点に対応した評価をしたことでより具体的に目指す姿、成果が明確となり、グループ内で共通理解を図ることができた。

実践記録シートについては、三観点に応じた目標の設定をする必要性や手立てを３つの項目「場の設定」「教材教具」「教師のかかわり」に分けることの難しさなどが課題として挙げられた。特に、目標の項目が三観点に応じたものでなく、「手立て・評価」に重点を置いていたため、個別の指導計画とのつながりが薄くなってしまった。シートの改善が必要である。

ウ　三観点での評価について

主体的な姿について、三つの観点「知識・技能」、「思考・判断・表現力」、「主体的に学習に取り組む態度」に分けて評価することで、児童を多面的に捉えたり教師が児童生徒を深く見たりすることができた。また、三観点を意識した話し合いをすることで、教師が児童生徒の姿を見る幅が広がり、話し合いの方向性がぶれることなく授業改善に取り組むことができた。

一方、主体的な姿を三つの観点に分けることの難しさが意見として多く挙げられた。評価が教師の主観によるものであり、様々な要素を含んだ主体的な姿をはっきりと三観点に分けることの難しさがあったためであると思われる。また、学習の形態によっては三観点の評価を当てはめることが難しく、特に「思考・判断・表現力」を評価することが難しいことが意見として挙げられた。

指導・評価のポイントを明確にしていくためにも、三つの柱に沿った目標設定や三観点に応じた評価規準を示していくことが必要である。各教科や各教科を合わせた指導において児童生徒の実態に応じた三つの柱に基づく目標を設定や三観点の評価規準を職員間で確認していくことがこれからの課題となっていく。

（２）まとめ

今年度は、２年次研究で推進してきた本研究のまとめの年であった。１年次より「主体的な姿を目指した授業づくり」の実現のため、また、本校の教育目標実現のために取り組んできた。その結果、それぞれの学部での児童生徒の実態に応じ「主体的な姿」を意識して有効な手立てを考え授業実践をすることができたことは成果であった。「主体的な姿」は、発達段階や特性によって見られる姿は大きく異なる。それぞれのグループにおいて求める姿を具体的な行動で捉えることで成長や変容を丁寧に見とることができる。このことは、継続し意識して取り組んでいけるようにしたい。

本研究では、ＣＳを通した活動として、小学部では地域のりんご園の方との交流、中学部・高等部は作業学習で地域に向けた販売を意識した活動、分教室は併設する小中学校との交流や地域の商店街との交流活動を実践として挙げた。コロナウィルス感染症の影響もあり十分に地域との関わりをもてなかった部分もあるが、これまでの活動を見直し様々な可能性を探りながら工夫して取り組んできた。今年度、ＣＳを通した学習活動の中で児童生徒が主体的に活動に取り組むことができたのは、地域との交流活動が児童生徒にとって関心の高い活動であり、上記した「主体的な姿をめざすための手立て」の観点で授業づくりをすることでさらに充実した学習活動になったからであると考える。

また、今回の研究に関わって各学部・分教室で取り組んだ活動は、地域を意識したと取組であり、その中で主体的に活動する姿を目指していくことは、将来的に地域、そして社会の中で主体的に活動する姿を目指すことにつながっていくと考える。

今回得られた主体的な姿を目指すための視点を教育活動全体に生かしながら、さらなる学習活動の充実につなげていきたいと考える。

Ⅸ　次年度に向けて

２年次における研究の中で、それぞれの学部（グループ）での児童生徒の実態に応じた主体的な姿を確認したことで、グループ内で共通認識をもって主体的な姿を目指す授業づくりをすることができた。本校の研究では、数年に渡って「主体的な姿」を目指す授業づくりに取り組んできている。その積み重ねで、毎日の授業作りに必要な手立てを考えていくことにつながり、ＰＤＣＡに沿った授業づくりの方法が身に付いてきていると感じる。

また、昨年度から、授業の中で児童生徒の「主体的な姿」を見取り、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「主体的に学習に取り組む態度」の三観点で整理してきていることで、三観点を意識しながら指導に当たったり評価したりすることができてきていると感じる。一方、主体的な姿を三観点で整理することの難しさがみられた。特に、評価が教師の主観となってしまい職員間で評価に相違があることや、様々な要素を含んだ主体的な姿を三観点で整理することの難しさ、三つの柱に沿った目標設定がされていなかったことでの評価の困難さが挙げられる。また、評価が次の学習活動に生かされているかの検証も不十分であった。

学習指導要領では、特別支援教育の知的障がいの教科について、児童生徒の実態を踏まえ三つの柱に基づいて目標や具体的な指導内容を設定し、評価については三観点に基づき行うこととなっている。そのため、「日常生活の指導」「あそびの指導」「生活単元学習」「作業学習」などの各教科等を合わせた指導についても、どの教科、どの段階の目標・内容を押さえたものであるのか、明確にして取り組んでいく必要があるということが示されている。

そこで、次年度の研究では、児童生徒が発達段階・特性に応じ、育成を目指す資質能力の三つの柱を確実に、バランスよく育むことができるような研究を推進していく。そのために、学校全体で学習指導要領の理解を深めて共通理解を図り、児童生徒の実態に応じた三つの柱に沿った目標の立て方や学習内容、指導方法、支援の手だて、目標に沿った三観点での評価について検討する。指導上の課題や授業内容の検討及び検証を行い、三つの柱について確実に育めるよう全校で研究を進めていきたい。

〈次年度研究の方向性〉

〇研究テーマ「(育成を目指す資質能力の）三つの柱を育てるための研究（仮)」

〇研究内容

・学習指導要領の理解を深める。
・各学部、分教室で対象となる教科や各教科等を合わせた指導を設定する。
・育成を目指す資質能力（何ができるようになるか）の三つの柱に基づいて、目標や具体的指導内容・方法（「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」）などについて検討する。
・授業実践をする。
・児童生徒の評価をする（どのような力が身に付いたか、三観点に基づいて評価する)。
・目標と評価、授業内容や指導内容、支援の手立て等の検討及び検証をする。

〇研究推進日程

・２年計画とする。

月	日	全体の取り組み
５	２７（金）	第１回全校研究会 ・１年次目の研究内容、方法、進め方についての確認
６	１５（水）	研究日①
７	１３（水）	研究日②
８	１８（木）	研究日③

９	１４（水）	研究日④
１０	１８（火）	研究日⑤
１１	１４（月）	研究日⑥
１２	２６（月）	研究日⑦
１	１８（水）	研究日⑧
３	８（水）	第２回全校研究会 ・全体研究のまとめ ・次年度研究の方向性について

Ⅷ　資料

（１）実践記録シート様式

〈様式１〉

実践記録シート

①日　時	令和　　年　　月　　日（　）～　　月　　日（　）
②学部・学年 作業班	部
③領域・教科等	
④授業全体で目指す 主体的な姿（年間）	
⑤単元・題材名	
⑥授業者名	
⑦単元題材の目標	・
⑧学習内容 ※箇条書き	
⑨支援・手立て	・場の設定、教材教具、教師のかかわり
⑩児童生徒の様子	・児童生徒の学習の様子を具体的に記録する。（事前に付箋に記入） ・三観点のどこに当たるかを検討する。 知識・技能　主体的に学習に取り組む態度　思考・判断・表現 ・活動に関わるエピソードや感想等も記載する。
⑪成果	・どのような支援が主体的に学習に取り組む態度につながったか　等
⑫課題	・課題、改善点　等

⑬職員の感想	・各自記入
⑭地域・保護者の方の 感想	【地　域】関係職員・地域連携主任が聞き取ったものを記載 【保護者】連絡帳等に記載があれば転記

単元・授業前

（１）①～⑨については、事前（授業前）に記入。

単元・授業後

（２）⑩について付箋に記入する。

（３）⑬、⑭について記入する。

研究日　※シートは、拡大印刷したものを使用。

（４）（２）で記録した児童生徒の様子について、三つの観点のどこに当たるかを検討し、分ける。

（５）「⑪成果」「⑫課題」を記入する。「⑪成果」については、どのような手立て・支援が主体的な姿につながったのか等について記載する。「⑫課題」については、改善点も含めて記載する。
成果・課題については、次の単元・授業に生かしていく。